

雷山千如寺の文化財



雷山千如寺の歴史

毎年秋になると、県指定天然記念物である楓の大木が華麗に咲き誇り、訪れた多くの人々を魅了する雷山千如寺。その創建は、明らかではありませんが、江戸時代の文献『筑前国続風土記』には、奈良時代に聖武天皇の勅願によって、インド出身の僧・清賀上人が開基したと伝えられます。

かつては靈鷲寺といわれ、怡土七ヶ寺（染井山靈鷲寺・一貴山夷巍寺・小蔵山少蔵寺・鉢伏山金剛寺・浮獄久安寺・種宝山楠田寺、いずれも現在はほとんど廃寺）の本山として多くの僧坊があり、雷山三百坊と言われていたようです。



木造清賀上人像
(鎌倉時代・重要文化財)

現在では、その多くの僧坊は姿を消しましたが、宝暦3（1753）年に福岡藩主・黒田継高により創建された大悲王院と、彫刻・絵画・文書といった数々の文化財に栄華の面影をみることができ、平安時代後期（12世紀）に作成された木造薬師如来立像・木造薬師如来坐像・木造不動明王立像が、古くからこの地に仏教文化が根付いていたことを示しています。

さらに、木造二天像（持国天像・多聞天像）は体内から発見された造立銘から、鎌倉時代後期である正応4（1291）年の作であることが判明しています。当時は蒙古の再々度の襲来に備えて鎮西探題が設置された頃であること、また造立願主が大蔵姓原田氏であることなどが注目されます。



木造二天像（左：多聞天像 右：持国天像）



雷山古図（江戸時代・重要文化財）



木造千手観音立像（重要文化財）

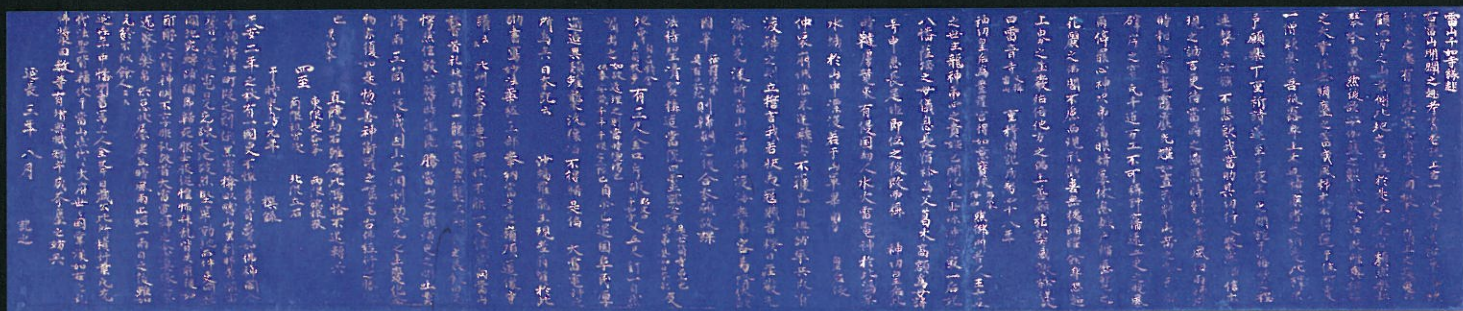
大悲王院の本尊・木造千手観音立像は鎌倉時代後期（14世紀頃）の作と推定され、像高4.63mで九州でも屈指の大きさを誇ります。千手観音は、衆生を救うべく千手を持つとされるもので、一般的には四十八臂に省略されますが、本像は実際に千手の表現がされている珍しい例です。

明治時代の神仏分離の際、雷山中宮（現在の雷神社）から現在の観音堂に移されました。

文書が語る千如寺

ヴェールに包まれた創建当初の様子に比べ、中世に入るとある程度具体的な姿が浮かび上がってきます。『大悲王院文書』には、13世紀から14世紀の間、盛んに伽藍建築を実施していたことが記されており、かつて雷山中宮は、正殿・拝殿・楼門・回廊に加え、鐘楼・経蔵・鳥居などを配した壮麗な伽藍配置であったことを伝えます。

千如寺のこうした繁栄に大きな影響を与えた要因として「蒙古襲来」という前代未聞の大事件が挙げられます。玄界灘を見下ろす雷山に位置する千如寺は、国防の最前線として鎌倉幕府の命を受け、祈禱所としての役割を担ったであろうことは推測に難くありません。巨大かつ優れた木造千手観音立像（鎌倉時代後期作）も、こうした激動の社会の中で様々な思いを受けて造立されたのかも知れません。



雷山千如寺縁起

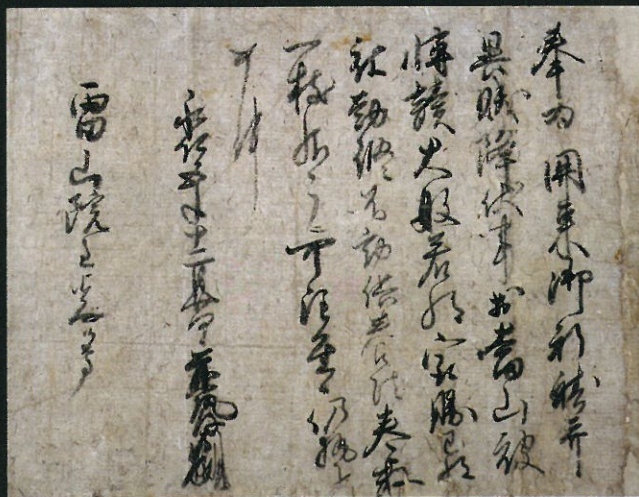
紺紙に金泥で記された縁起。風伯雨師の力によって一夜にして大伽藍ができ、これを雷音寺としたことや、神功皇后が雷山の神仏の加護によって戦勝したこと、清賀上人が寺を靈鷲寺と名付け千手観音を安置したこと、雷山には雨乞いに靈験があることなどが記されています。

巻尾には延長3（925）年と書かれていますが、史実と矛盾が多く、制作年代は明らかではありません。ただ、『筑前国続風土記』（1703年）にはこの縁起について述べられており、近世初期には存在していたことがわかります。

少弐盛経書下

元軍による3回目の襲来に備えて、鎌倉幕府の意向を受けた少弐氏が、大悲王院に大般若経・最勝王経を転読させ祈禱していたことを伝えています。

当時の大悲王院は、九州において大友氏・島津氏とならぶ守護の一人で九州の御家人のリーダー的存在であった少弐氏と積極的に結びつくことで信仰を集めたのでしょ。



豊臣秀吉禁制

朝鮮出兵の際に出された文書で、高麗国宛てになっているものの、実際は部隊内部の規律引き締めのため、秀吉のいずれかの部隊へ宛てたものと考えられます。

この文書と大悲王院の関係は不明ですが、他にも秀吉に関する資料が残っており、何らかの関係があったと思われます。

【お問い合わせ】

第19回国民文化祭前原市実行委員会（前原市教育委員会 文化課）
〒819-1192 福岡県前原市前原西1丁目1番1号 TEL: 092-323-1111（代表） E-mail: bunka@city.maebaru.fukuoka.jp